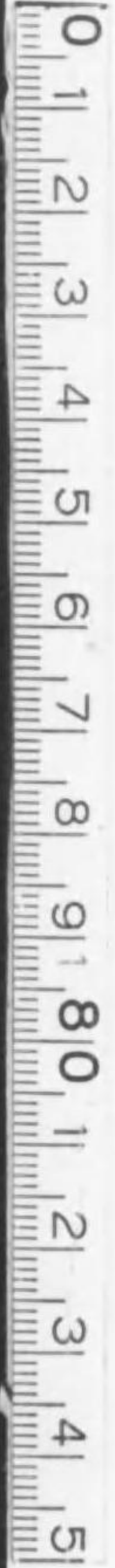


蒙古城記

十三

特279
237

254
52



始



包こわれくそ中子死せく彈き數もど其ま動く
礼落を少くてもある時ハ筋骨碎ちて即死す事 恰も
雷に討つるがごとく 右刀長刀の力をそく切結ゆる刃拂ゆる
去の例に敵對はへく絲を行末いふ必ゆるんと言ひ懼すもの
あまごを圓怖す者將少るるべ頼むがたは下りの物辨へぬ
ころちたう武士の形にあつたものを何ういふかおそむた西國北
礼防と懼き而業しく懐きて天降東西もあふく 再びある
事ありとも痛くあつて懲りめんともごをねしむ侍指さる
さても藩令より建治三年五月北條武義守義政執権の連署と
辭職して信州塩田郷に閑居せしむるが事ハ相模守時宗一判とて

本

大の事と油にせしむるを 建治元年義朝の使と由井清盛
斬罪しと和親の縁と断絶し ころちハ我國を航海して征討
をもあはせしむる禮と憤り懐きられけきむ彼國を怒りせ腹を
て其謀の軍法は御せし海は轉るるありんともちて文の
合戦と地集り 宗合將を軍略合和せしむるつう一日れ
戦ひし將卒多退屈し 陣をえられぬ軍無くて思の如く英氣と
扶くも戦ひむく 難儀小及び多負討死多き ころち甲斐文
らんれとけ度ハ一族を小系上徳介実政に命し 徳助へり向
せし西國の津島人會京部の大番子従ふものどもと皆に密に
随せし統率よりわくし 東國の津島人とよせし東國の



五ノ二

通有
背星
の家

師を補する実政務ありや向く海軍を巡見し地利を計りて
其地々の守る處地は高派して博多箱崎等の海邊に救里に
間築地をつき石垣城惣あげをう一丈あり切崖あり
屏風城建てるごとくすれば如何なる陣猫に敵うつも亦城
めづき極ざるにけ方表を平均し馬をうり強固を自由
よるんぐく構へうり矢兵糧秣をいれんと用意し海軍
ふも数艘の軍船と繋ぎつ今もこれに安んずるは皇威と威儀に
示たすけ度の戦ひも事々補等小後とて先んぬ軍軍に
心懸ひ思ひの卯より痛むるありし事々一事の悔しき今軍機
を見ん賺しうり何張丸のちと返せん押寄ある帆影と見えん

東に軍船をふおし賊徒が船も来りて分取高在せんもの
をすすんぐけけをり萬國より比類なく忠勇とせんして
義と識を和と忘れざるおのづから武國の風を天啓固如度
事ありあつたれ事ごとくは年月を何しうり強固に
今日より其の況虚をいはずえけし禁廷より清使と立
らし諸社諸寺の神佛を清洲預とせしめし増伏すべし
祈らせたり

唐軍大舉 統率来る事

弘安四年五月廿一日 幕府先陣 征東元帥 忻都 洪茶立等の
賊軍 救千波 寺伎 對馬 城さし 押寄あり 其の事

兵船五百艘をもちて一より二をばつて岸一より二をばつて
上陸の大勢を遂げしむるやひひく諸人等が勢を制し制し
未知のききひひくおぼふものを斬撃し其後暴あつた
るうへに海軍近衛居民等も逃おつてしまつて大軍を
討れけりひひくききと引連れ山の本宿谷の底に隠れ
逃るもいふあはて親し引連れしめていひひく
甚憂とすつけく尋ね求め親しきり暫時の命をうけ
とて可愛き子と我も子親して刺殺し隠れり子を
失ひく親しき何時まぐせん命をたぐる憂目減るやと
と強忍しむそ哀なる遠なる仲合少は幾多殺も数

初より森とくく連るる兵船對馬の二より三をばつて
對馬中あそくく家康は海軍をわたりて侍の西より南
この情志をのあふそい者より二の情を三に漏れしめて
惣領と侍合せていふよちるく押寄んとぬるあり
兵糧といふよ及るに鋤田と始めく農業の及るに穀
の船は積めたり必定軍に討勝て任階ぐくや甲をひけん一切の
雜具よりい何不足なく貯へあり

真清 家を草をたむく筆を投じて日右史はかきを
欲し新書をたむくを免むとせり我師琢齋先生
博學法記和洋の群籍を探索し子公命を奉り

傳つた歴史をた見取き書とらん凡此事に拘る事い甚実
と論ぜん新書と編むを編輯載して遺をたや一然るに
けき波敷馬の戦ひより我皇國に兵をくくして庶民の
擾乱を而し舉て戦後と討て更と記されざる古史不傳
事なり故より扼柄相別防海の軍略は深く心を用ひれ
たるに豈け二語を棄て省みざるの謂ありや後地臨海
の事なれば殊更不固衛と討て將率を撰定し兵を
至り幸必ず東國通鑑曰五月戊戌忻都茶丘及金方
慶朴球金周鼎等以舟師征日本幸西忻都茶丘金方慶
至日本世界村大明浦使通事金貯撤諭之金周鼎先與

倭交鋒諸軍皆下与戦即將康彦康師子等死之諸軍
向一岐島船軍一百十三人梢工三十六人遭風失其所之
遣郎將柳旻告于元又六月金方慶金周鼎朴球朴子亮
荆方戸等与日本兵力戦斬首三百餘級日本兵突退官
軍潰茶丘乘馬走萬戸復横撃之斬首五十餘級日本
兵乃退茶丘僅免翼日復戦敗績云云忻都茶丘等累
戦不利とらんえり按ぢらん是二島の戦ひるる一々中一
官軍潰も累戦不利もあまを子痛く南く北て度く
後軍せし事明らるるに我邦の史曲り此事を載せ
ざるを千載の遺憾といふなり

持て漕ぎ入り合備の沖方の軍卒其極子と云ひわたりて
何ういかに頼縁すといふを竹野の方らとて同じく記述
押さえて追て漕ぎをせりかくる治所恒長を頼りて
故に漕ぎの時の声を蔽へしおしりあると幸ひ斬て出れど
紙流等々大軍と相みあり夜打の用心更なるを忘る果し
をうかれは以てのやうに仰天し肉を踏まきつた戦小義務
多く用き靡れて逃げ心利する者ありと早く枝葉と放ち
敵より沖方の軍船逃しよとあせり来りまきを周夜の手まて
紙流等々大軍と相みあり夜打の用心更なるを忘る果し
をうかれは以てのやうに仰天し肉を踏まきつた戦小義務
多く用き靡れて逃げ心利する者ありと早く枝葉と放ち
敵より沖方の軍船逃しよとあせり来りまきを周夜の手まて

斬りぬぐに櫓小放ち火のまじりて燃えたりと睡り
写し油取火をくまぬまきとて船を圍めて我船は紅をとりけ
友船と己が船は火の移らん城をとり漕用えんとす漕漕
二一十大将は実檢に入道しり八月是れあまける次なり
河野通有なる名の本
伊豫國の佐人河野古市通有をけは八年以前より成神の社に
祈願しり日々は十年の中は是れ第一の志願して討死の
願しり若き若きとては是國へ押入り合戦して討死しり友船と
守りせり心奪りはいさすやとて數十枚の紙を成の志とてめ

三浦の社神前を火に焼く所なり其灰と呑んで其
ありぬるに今蒙古の大軍統率の仲におるとは
神の意も有りとして躍り揚つて雷と立本國とを
博多の着陣せり其浦より見るに海濱に築地をつ
札杭とてち逆着本を柱て要害を築く接つて通
を築く所は固く其地を築く所を築く所を築く所
築地は築地は築地は築地は築地は築地は築地は
決り接戦して勝負を一時は交すべし要害を頼む
士卒の心一致せんし必死の地は築地は築地は
陣とあり石垣と築く所は築地は築地は築地は

打つばるるなり是を今も筑地は築地は築地は
世も築地は築地は築地は築地は築地は築地は
左右なくも築地は築地は築地は築地は築地は
漕つて築地は築地は築地は築地は築地は築地は
築地は築地は築地は築地は築地は築地は築地は
めれば築地は築地は築地は築地は築地は築地は
今も築地は築地は築地は築地は築地は築地は
一心を念にける日本國中太水の神祇列してハ
八幡大神神徳利銭を築地は築地は築地は築地は
仲の方とて白漆の一羽築地は築地は築地は築地は



五ノ九

通有子名
の家

それバ肩免の郎曾野人射伏くまは深む所の仙父通時も
其時と負ひ我身も好うし肩と討られし響き此れなりと
けきで更に無事を失ふにぞもく進んぞ帆柱と故船より
お惣て猿の梢頭傳ふごとく一書子お移し其修大た刀抜き
かき一書雨よまする其は此隊將と覚しきを唯一た刀は斬伏
たり百餘人の老童若童る人と打をあくしするに船よまを
面もよん斬えり仙者守通時を関ゆる大割の兵をよまを
大長刀と水車よまを一書子よまをへど権る獅子奮迅の勢ひ
碎易く迎付傳ふ故より逆怒も通有る誓ひごとく
大将と討れんひさ切よまする太刀先小向ふ敵徒は善と乱して

斬伏くすれは、爽し打遣ひ玉の冠とかあひさうつ云々大将と
見えたる男の勇耶れ剣打振く通有は月け後今も通有得
たは頼み所と數十合戦ひが精神も高く無事一敵の剣を
お落し押さへてと組伏取なく是と生捕り敵徒の類に
是と見く我れ少くとお移し敵はあんとする折しも無て故に
焼草の炎端く燃より黒煙天と霞ひぬれど己が船は焼
せしとれは、四方へ漕開きぬ通有下知しては勢を固免ころか
船よまを福を時揚く漕開る其甚武威もや志もたん好うど
も影ら傳を放て進ふ者なるくはいと釋くと御方の陣へ
お寄せり仙者守通時を討り烈しく我ひて大業は深

救多有るれを帰る所中一死一なるハ惜む小餘る事なり
無有難々不の事と忍びて我生捕一城危の卯之の生捕
討死首と大將れ首実捕入けまを其武勇と海く賞一捕
の者成元同をるに通有の生捕一玉冠と着る一城危の大將
一人の中なる其其人とぞや多るさて是ハ首と刻く久方流を
成後といふ事の子おおせて遠く京都へ上せけが流まこも
所感賞と蒙りてり實り潔中武士此面白流後たこの事
こと

高瀬先隊待後艦事

扱も豫念をり松田城次郎宗景と始りて河田市郎遠後

安後江島三郎重綱多軍監として下向せし事なり
守後下野守久親同久長豊前豊後守護大友兵庫氏恭長
筑前と後小島三郎重武所宗資と始りて九列のち後地預
所家人多しづも忠勇と名を義親を看る一漢丸の大成
ゆもせむ毒を流遊も今を好まそ防ぎ戦やの所文水
戦ひは事多し築地一重も破を階に救千の船と連環
對陣をくく病りもそ兼て風回せりて後軍の致るを
待つけりて多ふりて改めし事なり其賊軍の保るぬ
写りて大友兵庫氏の嫡子御孫所人子勢をくらりて千餘騎と
川崎傳ひし押寄て痛く橋戦一首級と救多取りり

江南の軍兵を遣はし相會して所不王都へ責めんことを
其の代達へし我々の夥多なる大敵一其をくくし利あり
どしていざばし目を徑れんと兵報はんとそやんはゆるし
度病後行し病不侵し者ありしねバ親ふ義智と書書あぬ
只けしし軍を收めし飯陣せんりおなりと軍議はせんをせしん
金方慶政と打振り許信せしし日佐將も皇帝の命を請へ
違ふ是邦の征伐ははたしつを不破をゆきしし解信せし
屋きや此儀をいしゆるしと荒らめしとさつたれをそ目れ
評儀はゆるし又十餘日おぬれが再び會議と徑しぬふ
方慶をいしといしとち花回しとさつとてし軍旨をまじし

退く時をいししと所不見えしぬし二月の程を責したれば
今一月あつしとすぬを南軍難おは後々も今日明日の程
中をいしし相會しと戦し一時に孤信れ小夷と討年しげん
事素荒を捕しゆるし易かづしと席と打て利害と解き
けしと戦將も是し様と信し軍を回し議をししれど今け
路して戦し又是まじし勢半かく討死する者多きゆして
打捕ぬます事あし信軍れつとを待ゆるまで戦ぬぬま
能ぬめましと遠の澳しと近きて多き信し掛りしと夜うち調敷の
用心を密ししと信しし所方の信軍是とてし信しと信し
押きて勝負とすしと決せんしとちとちとち早れしと信し

軍船多し、孫バ、無念の雷鳴かみ、去る紀、一く日船と送たり
去程、小笠原吉の勲大將阿刺軍、虎文虎、江南よりを去りて、大澤と
押さるり、前隊、軍勢と云、攻め、會合、一もふたも、王傳へ
責入、なん、發せしむる事、なれど、今や、お陣、せんとす、ふ陣、んで
阿刺軍、俄、痛と、去りて、醫務、ほり、手と、盡せ、御快氣の
辨、も、え、ん、ん、出陣、さる、り、叶、さ、れ、改、め、阿、答、海、合、命、征、東
將軍、と、と、と、勲、大、將、代、ら、し、め、り、阿、答、海、を、俄、一、王、命、と、あ、り
左、新、事、な、ま、ま、を、軍、の、支、度、を、設、お、ん、と、討、劔、を、後、さ、ん、付、く、
か、い、も、香、や、角、と、辨、お、り、て、捕、く、六、月、の、末、つ、る、は、南、子、後、と、辨、
帆、を、揚、て、去、り、せ、し、七、月、の、末、結、ら、る、平、元、治、り、着、ふ、り、侍、り

まつる、茶、隊、の、軍、勢、を、さ、し、是、城、見、如、く、と、去、り、り、御、り
後、軍、の、御、船、も、平、元、治、り、は、勢、を、と、り、風、を、御、き、海、を、割、て
南、子、治、り、と、押、渡、り、其、勢、軍、九、十、万、余、人、兵、船、三、千、五、百、余、艘、
海、も、さ、ら、ふ、漕、船、も、さ、ら、ふ、三、千、艘、と、り、く、と、り、足、さ、り、な、れ
勲、軍、平、元、治、の、事、
お、り、海、倉、は、統、治、の、早、折、お、り、く、に、到、来、し、て、後、軍、の、勢、城、
達、し、め、れ、も、後、軍、の、御、船、も、さ、ら、ふ、三、千、五、百、余、艘、と、り、く、と、り、足、さ、り、な、れ
戦、艦、も、さ、ら、ふ、三、千、艘、と、り、く、と、り、足、さ、り、な、れ、中、方、な、れ、は、中、方、の、勢、
な、る、所、に、御、船、も、さ、ら、ふ、三、千、五、百、余、艘、と、り、く、と、り、足、さ、り、な、れ、中、方、の、勢、
中、し、て、西、國、へ、下、白、せ、し、め、り、若、け、し、大、事、な、る、所、に、御、船、も、さ、ら、ふ、三、千、五、百、余、艘、と、り、く、と、り、足、さ、り、な、れ、中、方、の、勢、



越軍夜渡
の圖



文永の度、倭王、異賊等の今又、夫、小、百、倍、して、形、を、神、意、不、
出、逢、ぬ、事、を、鬼、を、失、し、一、體、を、奪、え、れ、暝、眩、顛、倒、し、て、狼、狽、す、
よ、て、舟、を、な、き、數、万、艘、の、軍、艦、兵、船、撞、折、て、八、楫、碎、け、船、折、を、
艦、崩、も、激、甚、を、破、れ、く、及、ふ、後、を、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、
固、り、迎、え、る、を、な、ま、ば、十、四、五、萬、れ、賊、軍、等、悉、く、波、濤、小、溺、れ、
浮、ひ、沈、み、て、苦、し、も、死、ぬ、さ、げ、り、度、き、海、中、を、死、骸、を、あ、ら、
埋、め、を、れ、を、死、人、の、よ、を、臨、均、一、船、や、筏、を、用、ひ、ぞ、て、徒、歩、洗、足、
あ、く、三、國、へ、も、渡、り、ま、ぬ、魚、く、え、え、小、事、り、誠、や、け、年、こ、ろ、日、本、
國、中、に、は、人、填、ま、せ、ん、と、計、り、に、あ、り、ぬ、若、海、を、埋、め、る、神、符、の、經、
國、ひ、ま、る、べ、し、文、永、の、度、の、神、風、も、是、儀、一、旦、五、人、と、て、陸、を、拂、ひ

持、取、小、舟、を、や、唇、や、海、荒、か、一、船、破、れ、ま、ぬ、船、又、け、度、を、あ、ら、
害、津、高、藤、の、賊、軍、惣、大、將、も、死、す、打、て、お、き、用、さ、し、て、掃、
掃、り、其、日、を、終、り、形、勢、な、く、鎮、慶、せ、し、先、登、り、し、て、天、津、
地、祇、の、神、威、德、我、國、擁、護、の、神、威、力、あ、り、貴、く、や、あ、ら、ま、り、
此、神、力、を、恐、ま、し、人、々、更、に、あ、り、思、な、り、事、を、

風社官號勅許の事

か、つ、て、美、歌、の、取、も、ハ、砂、里、に、く、打、碎、け、り、を、中、に、は、希、有、不、
去、く、海、を、打、揚、り、ま、さ、ま、ひ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
水、め、て、之、高、人、計、を、使、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
て、迹、跡、と、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

是れ不打ち士卒を控て逐まわが其のハ知まざりたり
佛方を奪つて工兵城が安んずるに中と等く少武高軍の
尉常淵と大将として臨西に軍兵も敵百艘押寄る賊徒を
張萬元とよふ勇將と大将とす必死を極めて戦ひたり
其を國へ傳め今も流るも生延ぐとも賊等も必死に
極め命を限りに戦ひぬまは流るも如く討まぬれ何れ
敵一得ん散らふ打ちされ千人をくちらたかり流るも命を
をけまをまや兵隊小隊ををぬれば悉く生捕てを歸陣
まくりある程流るを極めして限も潜る一賊徒をを
残るに打ちぬきて生擒の賊徒をを船送るも

中川端より斬罪一ま竹緒むわく一兼首を首級に多
けまを山のてに打ち積る其儘に控まらり流るも
軍兵をゆりて免まけんゆせそのもあまて討免れ七人
や及びくそ敵右の械軍十万余を塵ををふける
帰る一者も干圓莫青兵五万とよ者一人のをわらり
諸社の靈路形を何まをづれもる記中も信濃國
流るに社ハを武神をまもるも清新も流るし小
七日小満なる其形を少つて流るの形を現るも
揮ふも是は怖偈作して帰國の後其事を流るも
常州毗清縣といふは日本流る大流の社を動傳へる

いづれもく者きたるに御禮と致すもわや想も字都なる門府
貞徳の實政の權兵とく中国勢を方餘人と引率し操り
そんで押行し備後よりあつて筑紫の早馬小行を以て
率の権子を回されけきをも熾軍悉く討まゆれば京極念ふ
没進れ者の使をたてて答へけるされと押し筑紫より向して
實政小面會し佐將士の軍勢を管しむ程海岸の難多備後
堅固なるべく沙汰及んれば社田城所等と固く徳政を
帰らまらり相皇大神宮御名荒本田尚長曲豐文太神宮御宣
度會貞尚等十二人共注文を連署して禁廷不奏圖りける
本宮の末社風の社に宮殿鳴動するもの良なること神威あり

希き雲一祥三動て山川を照も其光の中を悟りき姿のあ
あつてもまことと見只事ふあつてぞと御念ふ事なりか
隆伏の神威を現しませる事化法やひまの玉璽を宣り
せしき孫そんとぞ奉承し事御宣りもひ侍社に侍の侍後威
形跡ありて教士方の星形をも討つ男に侍の藤原とわ
果後ひぬる事をも御宣りたのひく種はましく官號勅符に
宣旨を賜ふるもつる方の子つ侍社の初なる皇神國を祿け
是の奴子が有る氣なく思ひ死して幾十度渡り奉ぬるも何時
いつの日もあつて孫を以てて彼醜國の凶徒の病毒をわが
又も寧ん奉るのあんとて宣させ奉るが針るごとく侍後威

終

